二〇二三年度

二月二日午前入試（第三回）

国　語（45分）

注意

1　開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2　答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。

3　終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4　問題のページは、1－1から3－13までであります。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

高校三年生のサーリャは、五歳のときに来日し埼玉県川口市で育ったクルド人である（クルド人とは、トルコ・イラク・イラン・シリアにまたがって暮らす民族の名）。サーリャの一家は、※難民認定を受けるための申請を続けており、この日は、日本の在留期間を更新する手続きをするために、東京都港区にある入管（東京出入国在留管理局）までやって来た。

机の上にすっと、書類を出される。

「難民申請は、不認定となりました。」

続いて、不認定の理由書が読み上げられる。

すごく普通だった。ローンの審査が通らなかったとか、そういうテンションと変わらない。このセリフをこれまで何度も、言ってきたのだろう。

私たちの人生を変える言葉とは思えない。冷たいわけでもないけど、温かみもない、抑揚のない声だった。

ずっと恐れてきたことだけれど、①その瞬間が、こんなにあっさりとしたものだとは、思っていなかった。

現実感のない私より、お父さんのほうが、ずっとずっと衝撃を受けていた。隣から、息が強く、荒くなっていくのが聞こえる。

「私は難民です。何が足りないですか。証拠ですか。」

お父さんは、右足のズボンの裾を捲り上げた。

「この傷は、トルコでデモに参加して、拷問された時の傷です。」

お父さんには、膝からふくらはぎにかけて、赤黒いミミズ腫れのような傷跡がある。いつも傷が隠れる長さのズボンを穿いていたから、私は久しぶりに見た。お父さんは、デモに参加した時に憲兵に捕まって、ゲリラの一員だと疑われて拷問を受けたのだ、と職員に向かって、改めて主張した。でも、この傷は迫害の証拠としては認められていないのだ。

「ここでは結果は変わりません。」

職員は顔を伏せて、傷を見ようともしない。

「見て。見てちゃんと。見ろ！」

お父さんが大きな声を出すと、それまで左右の部屋から聞こえていた話し声がぴたりと収まる。

「やめてよ。印象が悪くなる。」

私は、思わず、お父さんにだけわかるトルコ語で、そう言ってしまった。ここで騒ぐことで、拘束されたりしたら大変だと思った。

お父さんは強い眼差しで私を見つめ、②※憮然とした表情で息を荒らげている。別の職員が、私たち家族四人が提出した在留カードを並べて、事務的に告げた。

「本日からこのカードは無効になります。」

四枚の在留カードに穴あけパンチで、次々と穴が開けられていく。

パチ。パチ。パチ。パチ。

死ぬわけじゃないのに、私の頭には、走馬灯のように懐かしい光景が次々と浮かんでいた。

これまで、ここで過ごしてきた時間。出会った日本人。あおいちゃん。悠子先生。まなみ。しーちゃん。店長。聡太くん。希望を持ってここにやってきたクルド人。ロナヒ。アリ。お母さん。私たち。キャンプ。秩父の川。大丈夫だよ。初めて乗った飛行機。お父さんと再会したときのこと。家に来た、怖い人たち。めちゃくちゃな部屋。クルドの家、あれ、どんなところにあった。どんな家だったか、わからない。思い出そうとすると、今住んでいる、コインランドリーの二階の家が思い浮かんでしまう。ねえ、故郷って、どんな場所。石、お父さんの、石。それはこの前聞いた話だ。ロビン。※アーリン。※宇宙人。ドイツ人。大丈夫だよ。大丈夫じゃない。ぐらぐらと、積み上げた石が、揺れる。崩れる、危ない。崩れる！　頭の中がぐにゃぐにゃに、なって、歪んでいく。

これって、これまでの私が死ぬってことだ。

「これから、仮放免の準備に入ります。」

職員の声で、現実に生きなければいけない社会に戻される。

③仮放免。それが、新しい、私たちの身分だった。

職員は私たちに、これから課されるルールや制限について話し始めた。

「仮放免とは、本来はここに収容される方が条件付きで外に出ることができる制度です。まず、就労、働くことは禁止です。」

それに続いて、居住している県外に許可なく出てはいけないこと。保険が自費になること。このルールに違反した場合、いつでも、入管に収容される可能性があることが告げられた。仮放免のために、記入して提出しなければならない申請書や誓約書などが渡された。さらに、定められた保証金を納付しなければいけないという。逃走を防ぐためのものらしく、仮放免の条件を守り、入管からの呼び出しに応じていれば、仮放免の終了時に返金される。大人はひとり、二十万から三十万くらいって聞いたことがある。子どもはそれより安いらしいけれど、そんなにうちにお金があるんだろうか。

面接室の前で待っていた山中先生は、これまでと違う時間の長さで、全て察したみたいだった。仮放免のために必要な、私たちの保証人を引き受けてくれると言った。レインボーブリッジやお台場の明るい風景を見ながら、もう私は自由に東京にも、それ以外の場所にも行けないことを思った。急に、④目の前の景色が色を失っていく。

それに、働くこともできなければ、大学なんて、どうやって通えばいいのか。

「あなたたちは難民なんだ。この扱いは不当です。裁判所に訴えましょう。」

山中先生は、まっすぐに私たちの目を見て言って、お父さんも、頷く。山中先生は私たちをずっと、助けてくれてきた。難民申請の却下は、裁判をすれば、変わるんだろうか。

帰り道、山中先生と別れたあと、私たちはラーメン屋に寄った。品川にあるラーメン屋で、入管に来たらいつも寄るところだ。年配のおじさんが店主をしている、かなり年季の入ったお店で、本棚には所狭しと漫画が詰められていて、壁に貼られたメニューは油っぽく茶色くなっている。

入り口にあるラーメンとトッピングの券売機の前でお父さんは、今日は、トッピングを一人三つまで選んでいいよ、と言う。お父さんは、私たちより深く絶望しているはずなのに、私たちを励ましそうとしているんだ。

ロビンは喜んで、卵とチャーシューと、わかめを選ぶ。カウンターとテーブル席があり、カウンターに二人、テーブル席にも二人のお客さんが座っていた。厨房からは中華鍋で炒め物を、じゃー、と作る音や、麺の湯切りをする、ちゃっちゃっ、という音が聞こえてくる。

空いているテーブル席に座り、しばらく待っていると、湯気のたつラーメンが四つと、裏面がこんがりと焼き上げられた羽根付き餃子一皿が運ばれてくる。アーリンは自分だけ餃子まで頼んでいた。私の家では箸を使うことは少ないから、ロビンはうまく使えない。アーリンは日本人がよくやるみたいに、ラーメンをずずずっ、とすすって、音を立てて食べた。食事の時は音を立てないように、いつもうるさく言われているから、お父さんが怒るとわかってるはずなのに。案の定、お父さんに注意される。

「音はだめ。」

「なんで？　音出したほうがおいしいんだよ。やったことあんの？」

とアーリンはバカにしたように言う。

「やらない。」

お父さんは迷いなく答える。

「やったことないならわかるわけないじゃん、ね。」

アーリンがロビンに同意を求めると、ロビンは素直に「うん。」と頷く。

「味が違うんだよ。音がないほうが美味しい。」

お父さんがそう言ってるのに、無視するように、アーリンはまた音を立てて食べる。だから、私もわざとずずずと音を立てて食べて、

「うん。全然、音出さないほうが美味しいよ。」

と言った。⑤今日は絶対、お父さんの側に立ってあげなくちゃいけないと思ったから。するとそれを見たロビンもずるずる、ちゅるっと音を立てて食べて、声を上げた。

「おいしい！　味が違う。」

「えっ、おいしいの？」

さっきは音を出すのダメって言ったのに、お父さんはびっくりしたみたいにロビンに聞く。すごくすごく、優しい声だった。

ロビンが味が違うと言ったこと、お父さんはそれがすごくおかしかったみたいで、前のめりに頭を抱えて、大笑いしてる。少し涙が出たらしく、目をこすってる。音で、味が変わるなんて本当かな。思わずアーリンも大笑いしてる。

⑥こんなことで、みんな、笑いがとまらなくなる。ラーメン、おいしいね。おいしく食べたいよね。なんか、笑いすぎて、私もちょっと涙が出るくらいだった。

人ってこんなに悲しい時でも、こんなに笑えるんだ。

＊

荒川の橋の真ん中には、⑦東京と埼玉の県境を示す看板が架かっている。だから、私は、その先には行っちゃいけない。そういうことに、昨日からなった。私は自転車を止める。昨日まではただ通り過ぎるだけの看板だったのに。目には見えないけど、でも、私の国境線がここにある。

しゃー、がたん、と響く車の轟音も、濁った川面からたくさんの脚の生えた橋も、なにも変わってない。

車も人も自転車もみんな、昨日と同じように、あたりまえに橋を渡る。私だけ渡ってはいけないなんて、何かの間違いのような気がしてくる。

私のハンドルは、私が握っている。私のペダルは、私が踏む。そう思ったら、自転車は前へと進んで、県境を越えていた。自転車で川を渡ると、やっぱり、すごく、気持ちいいんだ。

行き先は、バイト先のコンビニ、Yマートだ。今日は珍しく店長がいなくて、少しほっとした。どう話したらいいのか、わからないから。

仮放免になると、働くことも許されない。でも、お父さんは今日も仕事に行った。働かなきゃ、生きられないって、山中先生も言っていた。

だから私も働いていいよね。大学に行くために働くのは、悪いことじゃないよね。店長がいない以外は、コンビニにはいつもとおんなじ時間が流れていた。

私はレジに立って、聡太くんが品出しをしてる。今日は私の学校はテストがあって、早帰りだったからいつもより少し長くバイトができる。聡太くんの学校もそうだったと言っていた。

「いらっしゃいませ。」

レジで商品のカゴを受け取ったとき、私の顔をじっと覗き込んだのは、白髪をオレンジがかった茶色に染めた、人の良さそうなおばあさんだった。牛乳のバーコードをスキャンする私に話しかける。

「あなた、お人形さんみたいねえ。」

「いえ……。」

「お国はどちら？」

クルドって知ってますか。私の国はないんです、と心の中で呟いてから言った。

「……ドイツです。」

「日本語上手ねえ。外人さんと思えない！」

おばあさんは、驚いたように、無邪気に笑いかける。

「ありがとうございます。」

日本語は、私の言葉なんです。だってここで、もう十二年生きてるから。ほとんどの記憶が、ここなんです。⑧心の声は、口に出せない。

「いつかはお国に帰るんでしょう？」

「……ずっとここに居たいと思ってます。」

パチ。パチ。パチ。パチ。在留カードに穴が開いた音が聞こえてくる。

「そう、頑張ってくださいね。」

そう言われて、私はぎこちなく笑みを浮かべる。ちゃんと笑えてるかな。

「ありがとうございました。」

頭を下げて見送り、また上げると、なにかが、お腹のほうからぐわっとこみ上げてきて、胸を通り抜けて、眼に涙がわきあがる。だめだ、止められない。

あのおばあさんは悪くない。何にも悪くない。頑張っている外国人を応援してくれただけ。そう言い聞かせても、憎悪を止められない自分が怖くなる。

知らなければ、何を言ってもいいの？　善意なら人の心を、土足で踏みつけていいの？　と叫び出しそう

になる。私は、黙ってレジを離れた。こんなこと、これまでだって何回も何回もあったのに。悲しみも怒りも顔に出さないプロになろうとしてたのに。⑨今日はぜんぜん、だめだった。プロ失格です。聡太くんが、私の代わりにレジに入って来てくれた。

午後五時、その日のシフトが終わって、店を出る。自転車置場のほうに行くと、聡太くんがいた。一時間も前にシフトが終わっていたはずなのに、待っていてくれたのか。帰る？　と聞かれて、うん、と答えた。聡太くんは自分の家の方へ曲がるはずの交差点で曲がらずに、少し遠回りして荒川の方に向かった。

⑩川口側の河川敷には以前、家族でよく行ったけれど、東京側の河川敷を、誰かと歩いたのは初めてだった。川沿いの道を、聡太くんと二人、自転車を押して並んで歩く。対岸を眺めて、聡太くんが聞く。

サーリャの家はあっちのほう？　ううん、あっち側。ここから私が住んでいる家は見えるわけないけど、目印になる高層マンションの方角を指す。

「ね、その自転車、自分で描いたの？」

⑪気になっていた自転車の絵のことを、やっと聞けた。

「そうそう。俺、描くの好きで。」

自転車の黒いフレームの上に、点描画のような色の点々がカラフルにちりばめられていて、いろんな色の花が咲いているみたいだった。私の自転車よりも、すごく自由な感じがした。

「これで学校通ってると目立たない？」

と聞くと、超目立つ、と聡太くんは笑った。

「最初は笑うやつもいたけど、好きなのに乗りたいなって。乗りつづけてたら、今じゃ誰も見てないよ。今日、サーリャに久しぶりに触れられたわ。」

⑫「……すごいね。」

思わず口に出ていた。

「そうかな？」

ぜんぜん普通だけど、って感じで言う。他の子に笑われたりしたら、私だったら心折れてしまうよ。

「それ、すごく、いいと思う。いいよ、ほんとに。」

と強く言った。ほんとだよ。嘘ばっかりの私でも、これは、ほんとの気持ち。

そのとき、急に視界がひらけた気がした。夕方の河川敷には人がいっぱいいる。スケボーを練習したり、ランニングしたり、寝転んだり、釣りしたり。たくさんの人が、それぞれ自分の場所みたいに思い思いに過ごしている。天気は曇りだったけれど、自由に過ごす人々の姿は、温かい陽だまりの中にいるみたいに、私には見えた。

私たちは、いつも渡る大きな橋のすぐ下に自転車を停めた。周りには草が繁って、目の前に荒川の水面が広がる。ぴちゃ、ぴちゃ、と川の水が流れてゆく音がする。そして、頭の上からは橋を渡るトラックの轟音が聞こえる。

聡太くんが、あげる、と新商品のシュークリームをリュックから二つ取り出して、一つ渡してくれた。川のギリギリまで近づいて、二人で河岸の石の上に座った。

向こう岸には自分の暮らしてきた街がよく見えて、これまで自分が過ごしてきた時間に向かい合っているような気持ちになった。

シュークリームの袋を開けて一口食べて、美味しいね、うん、うまいねと言い合う。それからしばらく聡太くんは黙って食べているから、私も黙って食べた。

無言でも気まずくはなかった。なんで一時間も待ってくれてたんだろう。私が落ち込んでいるのを心配してくれたのか。そう思っていると、

「もう落ちたの？」

と、聡太くんが言う。

「え？」

※「トマト。」

聡太くんは、自分の手のひらを私に見せた。

「ああ……。」

私は自分の手のひらを見て、聡太くんにも見せる。染料はほとんど落ちていて、でも、ほんのすこしだけ、赤がまだ残っていた。

「いい色だったのに。」

聡太くんがこちらを見ないで、ぽつりと言う。

「……ほんとに？」

「うん、俺、赤好きだし。」

私は、この色をいい、とか、よくない、とか、考えたことがなかった。生まれた時から定められていたような、ただの印のようなものだとしか思ってなかった。

でも、きっと聡太くんは、本当にあの色をいいと思ったんだ。

水面の深いエメラルドに、橋の隙間から一筋の光が射している。

私は自分だって、自由な温かい陽だまり⑬に行ってもいいような気がした。

やっと、自分で積み重ねた嘘のひとつを、空に飛ばす。

「私、ドイツ人じゃないんだ。」

トラックが大きな音を立てて、私たちの上を通り過ぎる。

聡太くんは、シュークリームを食べるのをやめた。じっと私の声を聞いて、言葉を待ってる。

「小学生のとき、ワールドカップあったじゃん。友達に、どこを応援してるのって聞かれてさ。ドイツって答えたの。」

「強いもんね、ドイツ。」

聡太くんの少しズレた答えが、私には心地よかった。でも、私は聡太くんを見られなくて、水面に反射する夕日が揺れるのを見ていた。

「みんなと一緒に、日本を応援したかった。でも、私が日本って言ったら変かなって。」

あの時の思いは、初めて口にした。自分が暮らしてきた街の、反対の岸にいるからこそ言えたように思う。ちらっと聡太くんを見る。

「考えすぎだよ。」

そう聡太くんは少し笑って言ったけど、私は笑わなかった。

「考えるよ。」

素直に自分の気持ちを返すことができた。私は、そのまま言葉を続ける。

「そしたらドイツ人だと思われるようになって。自分でもドイツ人、って言うようになった。」

聡太くんは、どうしてそんな嘘をつくかわからないみたいに首をかしげた。私だって、こうやって話してみると自分で不思議に思うんだ。なんで本当のことを言えなかったのか。聡太くんはすこしだけ、丸めていた猫背の背中を正した。

「サーリャは、どこの国から来たの。」

長い前髪の下から覗く、まっすぐな目が私に問いかける。

「……クルド。」

聡太くんは、クルド……と繰り返して、首を傾げて考える。自分の中の引き出しをすべて開けても答えは見つからなかったみたいで、どうしようって感じで首を掻く。

「ごめん、わからない。」

すごく、素朴で素直な響きだった。うん、みんな知らないから。そう答えながら、複雑な気持ちがないと言ったら嘘だった。私は、ちゃんと複雑だった。

聡太くんは、どうにか自分との接点を探してくれようとしたのか、

「ワールドカップ出てないよね？」

と聞いてくれた。首を振ったら、「サッカー弱いんだ？」と言うので少し笑って首を振る。そうじゃなくて、国がないから、クルドは出られないんだ。

「その、クルドの結婚式で手を赤くするの。新郎新婦の親戚がね。」

もう色が消えかかっているけど、まだ確かに染み込んでいるその赤を見た。

「赤い手見ると、思い出すんだ。自分がクルドってこと。」

私にとっては、これがせいいっぱいの言葉だった。

長い前髪の下で聡太くんが、どんな顔をしてるか、見たいけれど、見られない。二人で黙ったまま、少し、時間が流れた。聡太くんが口を開く。

「俺もね、青とオレンジ見ると、※伯父さんのこと思い出す。」

青とオレンジは、Yマートのお店のイメージカラーだから、看板や制服の色だ。

「それは、ちょっと嫌だね。」

「ちょっとじゃないよ、だいぶ嫌だよ。」

聡太くんは白い歯を見せて、からっと笑った。私も笑った。たぶん、からっと。

⑭その時、私はもう、曇り空の下にはいなかった。心がぽかぽかしたから。いつの間にか、車の轟音は聞こえなくなっている。優しい水音だけに包まれていた。

それから、お互いのことをぽつりぽつりと話した。

この場所は、聡太くんがバイト終わりに、ひとりでよく来る場所なんだって。対岸に見える埼玉の景色が好きなんだって。シュークリームを、こうやって、外で食べると楽しいんだって。ほんとだね。

そのうちに陽が沈んで、辺りはすっかり暗くなった。川口の高層ビルに光が灯る夜景は赤羽より都会っぽくて、綺麗なんだよ、と聡太くんが言った。

⑮私は自分が褒められたみたいで、少し誇らしかったんだ。

（川和田恵真「マイスモールランド」より）

※（注）難民――自国にいると迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々。日本で難民であると認められた外国人は、難民としての保護を受け、条件を満たせば日本に永住することもできる。
憮然――ここでは、思い通りにならなくて不満なさま。
ロビン――サーリャの弟。日本生まれの小学一年生。
アーリン――サーリャの妹。日本生まれの中学一年生。
トマト――私は聡太に手が赤い理由を聞かれ、「トマト食べ過ぎた」と言い訳していた。
伯父さん――Yマートの店長は、聡太の伯父さん。

問一　――線①「その瞬間」とはどのような「瞬間」ですか。解答らんの「ことを告げられる瞬間。」につながるように、文中の言葉を使って十字程度で答えなさい。

問二　――線②「憮然とした表情で息を荒らげている。」とありますが、この時の「お父さん」の様子の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　右足の傷が迫害の証拠として認められている以上、在留資格を失うのはおかしいと思っている。
イ　圧倒的に不利な状況の中、トルコ語で戦略をもちかけてくる娘の機転を頼もしく感じている。
ウ　目の前にいる職員を説得しても入管の決定は変わらないと気付き、冷静に現実を受け止めている。
エ　娘にたしなめられて態度を改めつつも、入管の不当な判断におさまらない怒りを感じている。

問三　――線③「仮放免。それが、新しい、私たちの身分だった。」とありますが、「仮放免」とはどのような「身分」ですか。それを説明した次の文の□にあてはまる言葉を、文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

条件を守らない場合には□という厳しい身分。

問四　――線④「目の前の景色が色を失っていく。」とありますが、「私」が「目の前の景色が色を失」うように感じたのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　仮放免のために必要な保証人を山中先生が引き受けてくれることになり、山中先生に申し訳ないと思ったから。
イ　居住している埼玉県から出て、東京などの場所に自由に来ることはできなくなってしまったと実感したから。
ウ　入管の外に広がるレインボーブリッジやお台場の景色が、またたく間に明るい夜の景色へと変化していったから。
エ　山中先生と一緒に裁判所に訴えたところで、難民として認められる可能性は低いのではないかと思ったから。

問五　――線⑤「今日は絶対、お父さんの側に立ってあげなくちゃいけないと思ったから。」とありますが、このときの「私」の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　いつもは食事の食べ方についてうるさく言わないお父さんが妹に厳しく注意しているのを見て、お父さんの悲しみの深さを感じ、お父さんの気持ちに寄りそってあげたいと思っている。

イ　私たちより深く絶望しているはずのお父さんが私たちを励まそうとしてくれているので、私もお父さんの食べ方のほうが良いと言うことで、お父さんの味方になってあげたいと思っている。

ウ　妹がお父さんに言われた食べ方よりも自分の食べ方のほうが優れていると言うので、私がどちらの食べ方も良いということを伝えて、お父さんと妹の間を取り持ちたいと思っている。

エ　お父さんが子どもたちとの外食を楽しむことでめいりそうな気持ちをまぎらわそうとしているのを見て、せめて自分だけでも明るくふるまってお父さんを元気づけたいと思っている。

問六　――線⑥「こんなことで、みんな、笑いがとまらなくなる。」とありますが、「こんなこと」とはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　家族の話を聞いていた幼いロビンが自分も音を立てて食べてみて、本当に音で味が違うと思って「おいしい」と言ったこと。

イ　次女のアーリンを怒っていたお父さんが、幼いロビンまで音を立てて食べて「おいしい」と言うので怒るのをあきらめたこと。

ウ　お父さんや長女のサーリャと同じように、幼いロビンも音を立てないほうがおいしいと思って「味が違う」と言ったこと。

エ　トッピングを三つも選べることを喜んでいたロビンが、出来上がったラーメンのおいしさに感動して「味が違う」と言ったこと。

問七　――線⑦「東京と埼玉の県境を示す看板」とありますが、「東京と埼玉の県境」を「私」が別の表現で言いかえている言葉を文中から五字でぬき出して答えなさい。

問八　――線⑧「心の声は、口に出せない。」とありますが、「私」が本当に言いたいことはどのようなことだと考えられますか。文中の言葉を使って一文で答えなさい。

問九　――線⑨「今日はぜんぜん、だめだった。」とありますが、どういうことを「だめだった。」と表現していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　普段はたくさんの日本人に応援してもらえることを仕事のはげみとしていたのに、今日は日本人に対する不信感を抱いていて、おばあさんから優しい言葉をかけられても素直に受け取ることができなかったということ。

イ　日本人のお客さんからめずらしがられて根ほり葉ほり質問されることは良くあることなのに、今日は自分のことを聞かれるのがどうしても嫌で、涙があふれてきてしまうのをこらえることができなかったということ。

ウ　普段からお客さんの前では常に笑顔でいることを心がけているのに、今日はおばあさんの無神経な言葉に反応してぎこちない笑みとなってしまい、お客さんに対して感じよく受け答えをすることができなかったということ。

エ　日本人のお客さんから配慮のたりない言葉をかけられることには慣れていたはずなのに、今日はおばあさんの言葉に対する激しい憎悪が止められず、感情をおさえて仕事に集中することができなかったということ。

問十　――線⑩「川沿いの道」とはどこにある「道」ですか。文中から七字でぬき出して答えなさい。

問十一　――線⑪「気になっていた自転車の絵」とありますが、聡太が描いたのはどのような「絵」でしたか。「絵」の内容について具体的に書かれている一文を文中からぬき出し、その初めの六字を答えなさい。

問十二　――線⑫「……すごいね。」とありますが、「私」は聡太のどのようなところが「すごい」と思ったと考えられますか。文中の言葉を使って三十五字以上四十字以内で説明しなさい。

問十三　――線⑬「温かい陽だまり」とは、どのような場所のことですか。解答らんの「場所。」につながるように、文中から三十字以上三十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問十四　――線⑭「私はもう、曇り空の下にはいなかった。」とありますが、この時の「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　聡太が「私」のルーツに興味を持ってたくさんの質問をしてくれたおかげで、初めてクルドのことを他人にくわしく説明することができ、クルド人としての誇りを感じて満足した気持ちになっている。

イ　「私」のルーツや聡太の好きなサッカーの話をしているうちにいつの間にか空が晴れており、天気の変化にも気づかないほど夢中で話せる存在ができたことを感じて、悲しい気持ちが少しやわらいでいる。

ウ　聡太に手のひらの赤い色をほめられたことをきっかけに「私」のルーツであるクルドのことを話せて、聡太も「私」の話を自分なりにわかってくれようとしたのを感じてあたたかい気持ちになっている。

エ　聡太に「私」のルーツについて打ち明けることができ、聡太が「私」の悩みに対して前向きな意見を言ってくれたおかげで、日本にいられなくなることに対する不安が消えて気持ちが楽になっている。

問十五　――線⑮「私は自分が褒められたみたいで、少し誇らしかったんだ。」とありますが、「私」はなぜ「自分が褒められたみたいで、少し誇らし」く感じたと考えられますか。「私」「川口の街」という言葉を使って説明しなさい。

問十六　この文章の内容として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　サーリャは、在留カードに穴が開けられていくのを見た瞬間、日本で出会った人々やさまざまな出来事を思い出し、日本での「私」が死ぬことだと感じた。

イ　サーリャはクルドから両親とともに日本へやって来て以来、生活がとても厳しかったため、大学へ進学することをあきらめていた。

ウ　サーリャの手のひらには、クルドの結婚式に新郎新婦の親戚として出席したときに染めた赤い色がほんの少しだけ残っていた。

エ　サーリャは、自分が暮らしてきた街の反対の岸にいるからこそ、自分のことをドイツ人だと言うようになった時の思いを聡太に言えたのだと思った。

二　次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一　次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 庭に鳥のスバコを作る。
② 大学でコテン文学を学ぶ。
③ 作家をマネいて講演会を開く。
④ ネッタイ雨林は生き物の宝庫だ。
⑤ 目標からギャクサンして行動する。

問二　次の①～④の――線の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

① 苦境を打破する。
② 山中の湖底に住む魚たち。
③ 店の規模を拡大する。
④ 新潟県は日本有数の米所である。

問三　次の①～③の文中の□にあてはまる漢字一字をア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 彼は複雑な仕事を□作なくやってのけた。
　ア 労　イ 動　ウ 不　エ 造

② 観光地には名物のおみやげがあるものと□場が決まっている。
　ア 急　イ 穴　ウ 相　エ 現

③ ライバル企業（きぎょう）の出現に際し、本社は□観の構えだ。
　ア 静　イ 直　ウ 主　エ 参

問四　次の①・②の文の〰〰線の語がかかっている部分はどこですか。ア～カの中からそれぞれ二つずつ選び、その記号を答えなさい。

①　彼女は（かのじょ）　食後に　ア紅茶を　一杯（いっぱい）、　イゆっくりと　ウ飲みながら、　明日　エ公開される　映画のストーリーについて　オ想像を　カめぐらせた。

②　ア この店では、他の店より　イ大容量の　食料品や　ウ日用品などを　エ取りあつかって　いるので、オ まとめ買いに　カ便利です。

問五　四季の変化がゆたかな日本には、手紙のはじまりに季節の言葉を使って時候のあいさつを入れるという習わしがあります。次の①～③の時候のあいさつは、どの月のあいさつにふさわしいですか。後のア～オの中から最も適当なものを一つずつ選び、その記号を答えなさい。

①　新緑が目にあざやかな季節となりました。

②　なにかと気ぜわしい歳（とし）の瀬（せ）をむかえるころとなりました。

③　梅雨（つゆ）明けの暑さひとしおでございますが、皆様（みなさま）お変わりありませんか。

ア　二月　　イ　五月　　ウ　七月　　エ　十月　　オ　十二月